乱数の女神の赴くままに

Almin

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

シャンフロ本編ＩＦ短編集です。

目次

風雲斎賀城⑥ルート妄想 ―――― 1
斎賀城からの脱出 ―――― 6
旅狼のオフ会 ―――― 21
旅狼のオフ会―遊びにきました！ 44

風雲斎賀城⑥ルート妄想

「あー……それ出ちゃうなら出力系以外にも問題があるパターンだ、流石に修理に出さないとダメだね」
「そうですか……じゃあ、その……お借りさせて頂きます」
俺が普段使ってるベッドよりも柔らかそうな布団の上でぺこりとお辞儀をする斎賀さん、構わないと手を振りつつ立ち上がり……セルフ迸る電律（スタンピート）が足にィ!?
「ぬおぁっ」
「大丈……きゃっ」
「おぉぉお!?!?」
足の痺れの体勢を崩し体勢を崩し、次の瞬間には天地が逆転していた。
すごい。天井が高い。
ではなく、どうやらあの一瞬で斎賀さんが俺をつかみ投げてベッドに下ろしてくれたらしい。
そういえば確か斎賀さんって柔道?やってるんだったか。畳って転ぶと意外と痛いんだよな。

「いやぁ、ありがとう。斎賀さ…っ!?」
起き上がりかけた俺の肩を斎賀さんが掴んで押し倒す。
「……」
「……」
え？俺何かやらかした？布団に乗っちゃダメだったとか？いやでも布団に乗せたのは（推定）斎賀さんだし…
「ご、ごめんなさい…？」
「……」
思わず謝ってしまったが、応答はない。
無言で俺に馬乗りになる斎賀さんの顔がいつも以上に赤く染まっているのが分かる。息も荒いし、目の焦点も定まっていないように思える。
いやしかし綺麗だな斎賀さん。こう近距離でまじまじと見ると改めてそう思う。
いや、近すぎるだろこれ。これはまずい。非常にまずい。主に絵面がまずい。
「…あの…斎賀さん…？」
なんとか布団から出ようにも斎賀さんが肩を抑えていて動けない。こちらから下手に触るわけにもいかないし、振り払うのも何か失礼な気が…
「……キュウ」

ポスン。

聞きなれない音とともに肩の拘束が解け、斎賀さんが倒れ込んだのが分かった。

さて、ここで問題です。

俺に馬乗りになった斎賀さんがそのまま倒れるとどうなるでしょうか？

答えは…

「お嬢様、少々本日のご予定について……」

問題を変更しよう。

一布団と斎賀さん（うつ伏せ）にサンドイッチされた《布団の上で抱き合っているようにも見える》様子を目撃された俺はどうするべきか？

「……失礼致しました」

「いや、これは、ちが……!!」

弁明する間もなく、何を察したのか使用人は襖を閉じて立ち去り、静寂が訪れた。

「……いやこれどうすんだよ」

改めて見れば、斎賀さんの反応はなく。どうやら気を失っているようだった。

……とにもかくにも、まずは斎賀さんを下ろすしかないか。

斎賀さんの普段着がフォーマルな和服で本当に良かった。

着物は寸胴の方が見映えが良いから、タオルとか仕込むんだって親戚の叔母さん言ってたもんなぁ。そう、あれはタオル。この柔らかい感触はタオル。
ディプス焼き殺すロステイ。
「……」
なんとか丁重に布団に下ろすことには成功したが、先ほどの一感触件がフラッシュバックして斎賀さんの顔を直視出来ない。
可能なら今すぐにでもこの部屋から出たい。そして帰りたい。ラブクロックならここで本当に帰ったり、叩き起こして叱る、なんて選択肢もあるし正解だったりするが、それだけはやってはいけないと脳が警鐘を鳴らしている。

……
「……１３２５，１３２６，１３２…」
「……んぅ……」
「あ、起きた？」
「……ふぁい……？」
斎賀さんが起き上がる。

「りゃ、楽郎くん?!」

斎賀さんが驚きの声を上げる。

パニクる斎賀さんとは対照的に、俺の心は澄みきっていた。

そりゃぁ天井の木目を１３００も数えてたら落ち着きくってもんですよ。

まだ素数を数える方が有益だったんじゃないかなどと瞑想する思考を引き摺り戻し、斎賀さんに事の顛末と謝罪の意を述べる。

斎賀さんも気絶していた件が余程申し訳なかったのか、謝罪合戦の末にお互い土下座姿勢で硬直。

なぜかそのままシャンフロの予定の話になり、結局、帰る直前までお互いに顔を上げることはなかった……

斎賀城からの脱出

「ん……」

目が覚めるとそこには白い天井……ではなく、太い梁。

「いや、どこだよ」

和風の平屋、というのは分かるがそれだけだ。

あー、いや。思い出してきた。

「玲さんちに来てたんだった」

ことの起こりは一週間前、玲さんからＳＮＳで相談を受けたことだ。要約すると、お姉さんの理解を得るためにもう１人のお姉さん（サイガ）がフルダイブＶＲをさせたいと相談された、と。

まあ、つまり相談の相談なのだが。

いきなりメットを被って寝転がるフルダイブＶＲよりかは、実際に体を動かすＡＲゲームをまずはやってもらったらどうか？と提案したところ即日決定。

で、今日はそのＡＲマシンの試運転に呼ばれて来たわけだ。

「テーマパークで体験できるし、と言ったつもりが、まさか買うとは……斎賀家恐るべ

し」

一般家庭にＡＲマシン置くスペースなんて普通は無いんですよ。それ以前に高額でもあるのでやはり一家庭で買うもんじゃない。

「……ここ、見覚えがあるな」

玲さんの部屋にそっくり……というかそのものだろう。

ダメだ。ＡＲ部屋……部屋？になった蔵で、ゴーグルを着けたとこまでしか憶えていない。

「これはピザコース待ったなしだな」

「取り敢えず待てば誰か様子を見に来るだろ」

◇◇◇

だ　れ　も　こ　な　い

「物音すら無いな……」

あまり人の家を歩き回りたくないが仕方ない。

「……あれ？」

「なんだこれ……南京錠？」

部屋の出入口のはずの引戸には南京錠がかかっていた。

「いや、意味が分からない」

なんで部屋の内側に鍵が掛かってるんだ？
「入り口ここじゃ無かったっけ？」
引戸はもうひとつ見えるが、あちらは物置だろう。
は人の通れそうにない収納の扉と……
机の上に白い紙がある。
「これ書き置きだったりしないか？」

鍵を探せ

あー。そういうことね。完全に理解した。
「どおりで押し入れの扉に変な落書きとテンキー（電子ロック錠）があるわけだ」
記憶が飛んでいるのは気になるが、ようするにこれは脱出ゲームだ。
「ヘルプは確か……」
ARゴーグルのボタンを押したことで、ARシステムのヘルプが呼び出される。
目の前のウィンドウに表示されるタイトルは……
『見馴れた部屋からの脱出』
――あなたのお部屋が密室に大変身！

最新技術によるあなたの部屋に最適な脱出ギミックが構築します。
グローブからもたらされるリアルな質感をお楽しみ――
『閉じる』
「怪しすぎる……」
如何にも『機械翻訳しました！』な説明文もそうだし、ここは玲さんの部屋だぞ？
「流石に女性の部屋でやるのはな……」
倫理的にというか、バレたときの外聞がヤバすぎる。
……ん？
「あれ、え？ゴーグル外れないんだが？？？？？」
というより外せない。
ゴーグルの弦を持とうとするとこう、指が曲がらなくなるというか。
「……ダメだ」
グローブを取ろうとすると指が勝手に開くというか。
『ルナティックモード!!!は攻略まで外れません』
「誰かいませんかー！！！？！？！？！」

◇◇◇

「こちらサンラク、これよりミッションを開始する」
いや、違うんだよ。
これくらいしないと覚悟が決まらないんだよ。

何度か叫ぶも誰も来ず、
ゴーグルもグローブも外れず、
引戸は引っ掛かりが浅すぎて手以外では開けられそうにもない。
「ヘルプボタン押しながらなら外せるとかあればよかったんだけどなぁ」
これ以上とやかく言っても仕方ない。
「取り敢えずそこの戸棚から……」
さっきから視界に衣装箪笥が入ってくるが、お前は絶対開けないからな。
戸棚を開けると本来の収納物の手前に、これ見よがしにアイテムがポップする。
「……マイナスドライバーか」
マイナスネジを回したり、隙間に差し込んで抉じ開けたり、モノによっては柄を外してプラスにする、なんてのもある定番のアイテムだ。
某ゲームではこれを鍵穴に差し込むと問答無用でどこでも開けられる、なんてのもあったけど……

「流石に開かないか」
こう、ポリゴンの隙間に差し込んでオブジェクト破壊とか……はい。すんません。そりゃできませんよね。
取り敢えず戸棚を閉めて、反対の戸を開けてみる。
「何も無し、と」
まずはこのマイナスドライバーを使う場所を探して……と言いたいところだが、俺は知っている。こういうのは案外「他のアイテムがないと開けれない場所」だったりするんだ。
つまりは総当たりが最適解！
……
……
はい。ありましたね。
和室用の足の短いテーブル（名前が分からないやつ）の下にマイナスネジで留められた鉄板……玲氏のルームに元からあるものには見えない。
早速アイテムからマイナスドライバーを出してネジを取り……おっとマイナスドライバーが消失した。
「用が無くなったら消されるタイプか」

太古の脱出ゲームでは当たり前だったらしいが、フルダイブVRだと消えないタイプもある。というか某クソゲーはそのせいで色々できた。

「リアリティ優先した仕様って触れ込みだったが……レンチ一本で何でも壊せたからなぁ」

扉の中には良く分からんカードが1枚。こういうのはだいたいカードキーか組み合わせで隠されたパスワードが読めるタイプだ。

使えそうな場所は……と、

お、本棚がある。

「こういうところは本に鍵が挟まってたり……ん？」

本棚だから書籍ばかりかと思えば、漫画やゲームソフトも並んでいる。名家とは言え、玲さんも高校生だもんな。

シャンフロのやり込みからしても不思議では……

「Ｎｅｐｈｉｌｉｍ（ネフ）　Ｈｏｌｌｏｗ（ホロ）、　えっ、　辻斬・狂想曲（幕末）オンライン？　ベルセルク（便秘）・オンライン・パッション（秘）もある……スリリング・ファーム（牧歌的）っておいおい……」

いやまあネフホロはルストに買わされて（勧められて）、幕末も京極経由として……便秘はワンチャン秋津茜か？

なんで危牧？

「いや、マジかよ……」

疑問とともに何気なく手に取った危牧のケースの内側に2枚目のカード。

こう運が良いと不安になってくるな。

「まあこの手のゲームは総当たりが基本だし？」

◇◇◇

「……あった」

押し入れの暗号的に、このカードたちは電子ロックのパスに対応してるんだろう。

となると残りは1枚な訳だが……

さっきから視界を右往左往する衣装箪笥以外はほぼ調べ尽くした。

おそらくこの後使うアイテムもほとんどある。

となれば、選択肢は1つ。

「残り1桁なら総当たりすればヨシ！」

開いた。

「どうやらアイテムフラグは無かったようだな」

押し入れの扉を開け放つとそこには布団といくつかの段ボール。

そういえば前に来たときは布団が敷いてあったが、和式の布団って寝る時以外はしま

うものなんだっけか？
布団を少し持ち上げ間を見る。なにもない。
「まあ本命は段ボールだ」
中身は……封のされた手紙、なにかの空き箱（丁寧にラッピングされていた）、手紙、手紙、空の写真立て、手紙、空き箱、手紙、手紙……まあおおよそ手紙だ。
その奥にひとつ、小さな鍵があった。こらはＡＲシステムで表示されたアイテムだ。
奥にもう１つ段ボールが見えるが……この鍵を取り敢えず使うとしよう。開けて気づいたが押し入れの段ボールはプライバシーの巣窟だった。
これ以上は探さない方がいいだろう。

さっき入手したアイテムをアイテム欄から選択して確認する。形状からして南京錠の鍵だな。
「ま、開かないよな。アイテム余ってるし」
出口の鍵ではない、となればもう１つの南京錠……衣装箪笥についている鍵の可能性がとても高い。
「……」
開けてない段ボールがもう１つあったよな。

何もなかった。
うん。何もなかった。
少し開いた隙間から布地なんて見えなかった。

◇◇◇

「誰かいませんかー?!?!?」
俺は気付けば畳の上に大の字になって叫んでいた。
結局あの後、一通り調べ直したが新規アイテムも情報もなし。残るは友人の女性の部屋にある衣装箪笥と衣類入りの段ボール。あれを開けたら社会的に終わる。
戸を無理矢理開けようにも、専用グローブのせいで戸を掴めないし、襖扉なので腕を引っ掻けることも難しい。
所謂詰みだ。
進行不能バグやらリセットバグは幾つか経験したことはある。そんなものでも（バグだらけだからこそ）解決できることもあった、が今回は別だ。
そもそもこれは俺の問題であってゲームの不具合では……いや不具合だな。

ルナティックにしたら最後、難易度変更もギブアップもできないのはダメだろ。
第一、なんで俺は一人で玲さんの部屋にいるんだ？
玲さんのお姉さん（サイガ－１００）の二次下請けで来た斎賀家はまだ斎賀城で、まあ運良くラスボス（お爺さん）とのエンカウントは回避できたものの、余っている倉という財力の差を見せつけられ、およそテーマパークでしか見ないようなＡＲキットを組み立て、試運転にと起動して……
「起動してそのあとどうした？」

そうだ、お姉さんにプレイしてもらう当たり障りのないゲームを幾つか買ってみたから試したい。という話になって、元々武道を嗜んでいるなら格闘系のゲームもいいだろう、って話になったんだったな。
玲さんいわく、ＡＲゲームには対戦型の格闘ゲームはほとんど無いらしく――そりゃそうだ、ＶＲと違って実際に相手を殴りかねないからな――一人プレイタイプの格闘ゲームを起動した。
「で、うっかり足が滑って頭を打った、と」

ＡＲヘッドギアに衝撃吸収機能が義務付けられていて助かった、というところか。いつものノリで生身とはいえこれは恥ずかしいな。体を鍛えた方がいいか？いやＡＲは

そんな頻繁にやるもんでもないしそこまですることはないか。
それで取り敢えず目を覚ますまで部屋に寝かせられていた、と……なぜ『見馴れた部屋からの脱出』が起動してるのかは良く分からないし、呼んでも誰も来ない理由にもならないが、玲さんの部屋にいる理由だけは分かったな。

その時、唐突に戸が開いて
「りゃっ、楽郎くん、起きまし……」
玲さんが入ってきて
「……あれ？楽郎くんどこにっ、あっ」
部屋の入り口に寝そべっていた俺に躓いて
「あっ、玲さ……」
畳に肘をついて、1回転。着地際に反転してそのまま正座する。
「……完璧な受け身だ」
「りゃっ、らっ、楽郎くん大丈夫れすか?!?!」
手に持っていた水が思いっきり俺にかかってしまったが、まあそこは採点外ってことで。
「いや、こんなとこで寝そべってた俺も悪いし……あ、そうだ」

事情を説明して、ようやくＡＲヘッドギアを外れた。
水がかかったのがヘッドギアではなく、俺の股間で良かった。これほんと高いんだよ。
「いや、大丈夫だから。玲さん」
土下座して謝る玲さんをなだめつつ、やっと自由になった両手でグローブを外す。
「まあ、そういうことだから、『見馴(こ)れた部屋(の)からの脱出(ゲーム)』はやるなら難易度ノーマルがいいよ……ルナティックは論外」
「本っっっっっ当にすみません！」
「いや、だから大丈夫だって」
「どうしたのですか？玲」
あっお姉さん。お邪魔してます。
……
……
「なるほど、そういうことですか。」
事情を聞いたお姉さん(斎賀仙)の目が冷ややかになる。まずい。ここでゲームの悪印象を増やすわけには……!!
「いや、その、まあ今回は事故みたいなものでして……」

「ほう？」
「こういうものには説明書と言うものがあってですね……」
「それで？」
「読んでいれば避けられたと言いますか、知らないうちに起動していたのが問題と言いますか」
「もしかして、あれでしょうか？」
「……はい？」
「楽郎さんがここに寝ているのを偶然見かけまして。これがえーあーるへっどぎあなるものか、と少し触っていたのです」
「ええと、具体的にはどのあたりを……」
「外して近くで見てみようと思ったのですが、うまく行かず、右側のボタンを何度か押してしまいました」
「あの……姉さん、それがゲームの起動ボタンです。」
「あら……」
「……」
「……」
「楽郎さん」

「はっ、はい」
「服が濡れてしまいましたね。」
「いえ、このくらいは……」
　いつの間にか女中の人が胴着?を持ってきている。
「乾かしますので、こちらに着替えてください。フリーサイズなので大丈夫です」
　あ、別の人が今度は紙袋を――
「下着は新しいものを用意しましたので差し上げます」
「いえ、そこまでしていただかなく、て、も……」
　だめだな。目が「決定事項です」と語っている。
「では、ここに置いておきますので、着替えたら呼んで下さい」
「あ……はい。」
　……
　……ん?ここ?!
「一度出ますよ。玲」
「えっ、ひゃっ、はいっ!」
　玲さんとお姉さんと女中さんが部屋から出ていき、戸が閉められる。
　……女性(玲さん)の部屋で着替えろと?

旅狼のオフ会

ペンシルゴン：という事でオフ会しましょ
秋津茜：いいですね！
サンラク：いやどこが「という事で」だよ
ペンシルゴン：いやほらさ、旅狼ってほぼほぼリアバレしたじゃん？
オイカッツォ：僕とペンシルゴンは全員にバレてるんだっけ？
サンラク：そうだぞプロゲーマー
オイカッツォ：どうもクソゲーマー
サイガ—0：元々知り合いの人もいますしね……
ルスト：ネフホロの布教のためならやむを得ない
サンラク：極まってんなぁ
ペンシルゴン：京極ちゃんは？
サイガ—0：時間的に稽古中かと……
ペンシルゴン：そっか。西日本優勝おめでとう。って伝えといて。茜ちゃんも次全国

だっけ？
秋津茜：はい！頑張ります！
サンラク：で、ホントにやんの？
ペンシルゴン：店もホテルも予約済みです
オイカッツォ：拒否権なしじゃん
ルスト：知らないうちに親に話が通ってた
オイカッツォ：ホラーじゃん
モルド：「大人気モデルと行く一泊二日の旅」
サンラク：ペンシルゴン、おまえまさか……
秋津茜：あ、それうちにも来てました！
モルド：ペア参加券が当選しましたって手紙が突然来て
秋津茜：私のはお一人様でした！
サンラク：お前それうちには送ってないだろうな？
ペンシルゴン：送ったのは2通だけだよ。なに？ほしかった？
サンラク：絶対にやめろ
ペンシルゴン：まあ君たちは自分で一泊くらい予定作れるでしょ

◇◇◇

「……で、だ。何で麻雀なんだ？」

一泊二日と言っても、オフ会のメインは2日目の日中――未成年を夜遅く1人で帰すわけにはいかない、という至極真っ当な理由――で、1日目は移動と宿泊のみ……とはいかず、何故か俺達は卓を囲んでいた。

「予約した旅館にあるゲームってやりたくならない？」

「そういえば、ペンシルゴン。ホテルって言ってなかったっけ？」

ジャラジャラ

「宿泊施設って意味じゃホテルも旅館も一緒でしょー」

「和室もいいですね！」

ジャラジャラ

カツ、コツ、コツ

「っよっと！」

ジャララン

「くっそー」

「サンラク、諦めて普通に積もうか」

「お前らができるのに俺だけできないのはなんかなぁ」

カッ、コッ、コッ
「……ほっ！」
「っしゃ。できた。」
「まあ1卓やればサンラク君なら慣れるでしょ」

◇◇◇
「和了（アガリ）～」
「くそ、俺の字一色小四喜が……」
「サンラクは大役狙いすぎなんだよ」
「流石にそこまで鳴かれたら判るよねぇ」
「そういうお前の役はなんなんだよ」
「今和了ったカッツォくんの役は――立直平和の……うん。ドラ裏ドラなし」
「点数は――分かる人いる？」
「はいっ！さっぱりです！」
　返事が元気なのは良いことだ秋津茜。
　当然俺も分からないが……ペンシルゴンとカッツォも首を振っている。ダメか。
「全滅だな。」

「でも支払い無しは面白く無いよねぇ」
「あ、これどう？画像認識で自動計算するアプリだって」
「「採用」」「すごいですね！」

◇◇◇

「また小四喜狙い？」
「字牌が来てないだけだ」
「ホントかなぁ……それチーね」

「カッツォくん、また平和？堅実だねぇ」
「こう言うのは和了ったもん勝ちでしょ」
「じゃあ私の勝ちだね。それロン」

「サンラクくん、今切る牌間違えたでしょ」
「言いたいだけだろそれ」
「間違いない」
「なにおうー?!」

――

「……ねえサンラク」
「……俺もそう思ってる」
「ペンシルゴンお前なにした？」
気付けば俺とカッツォは風前の灯。一方ペンシルゴンは単独トップ。
「なんのことかなぁ？」
とは言えリアルでイカサマをできるような技量があるとは思えない。
「私はなにもしてないよ」
「……」
まあ、証拠もないしリアルの麻雀で殴りあいするわけにもいかない。今はこの卓を終わらせよう。
「あ、すみません！」
「どうした秋津茜」
「なんでしたっけ、あの……きゅうじゅうきゅうはい？」
「九種九牌ね、ってことは流局かな。一応牌見せて貰っていい？」
「はい。これです」
パタリ

「……」
「……」
「……」
「「国士無双じゃん」」
「え？なんですか？コクシ……？」
それも１３面待ち、いまは南４局だから親は……
「……親なら最初は１４枚だから、１枚足りないな」
「……あ、ホントですね！今引きます！」
秋津茜のか細い腕が牌の山へ向かう。
全員が固唾を飲んで見守る中、引いたのは……
白（ハク）
「国士無双」
「１３面待ち」
「天和」
「えっと……これは……？」
「計算するまでもないな」
「そうだね」

「え？え？」
「優勝！秋津茜！」
「え！やりました?!やりました！」

「……何かあったの？」
「国士無双１３面待ち天和」
「え？それってものすごいことなんじゃ……」
「「……？」」
　ルストとモルドは初心者なのでなんのことやら、といった様子だが、流石玲さん。こちらにも精通していたか。
　京極は……と視線を向けるとあんぐりとお手本のような驚き顔だ。そうだ、どうだすごいだろう。
「なんでサンラクがどや顔なのさ」
「いやまあ実物を見れただけでも凄い運良いとは思うけどね……」

「れ……サイガ―０（ゼロ）ちゃん、そっちは？」
「これから東４局です」

「ルストと僕はサイガ―0（ゼロ）さんに局ごとにアドバイス貰っていたので、余計に時間がかかっちゃいましたね」

『ルール知らんやつが悪い』方針で各々ルール確認してたこっちとはえらい違いだな。外道共のノリに巻き込んで悪かったな秋津茜。

点数は……全員似たようなところか。

「キリもいいしこれ終わったらメンバー交代かな」

まだやるつもりか……と言いたいところだが、時間も早いし、正直玲さんとも一度囲んでみたい。

「……分かった」

「じゃあこの局で最後だね。まあ見ててよ」

しかし、いつも会ってる玲さんはともかく、みんなゲーム内と印象が変わらないな。

秋津茜とルストは見た目もほとんどシャンフロアバターと同じだし、モルドと京極も雰囲気はそのままだ。

――

ルストは分かりやすいくらいの染め手……萬子染めなんだがお前萬子ほとんど握ってなかったよな？

対してモルドは七対子……と言うより回しかたを見るに元は四暗刻狙いか？いや、断

么九対々和から牌が来ないから七対子にシフトしたのか。
　玲さんは……これまさか四槓子狙い？
　京極は大役狙いだが……
「……ロン」
「あーっ！やられた！」
「いや京極、もう少しで和了れたって雰囲気出してるとこ悪いが、その緑一色フリテンだからな」
「え？あ、ほんとだ！」
「……私の勝ち」
「少し狙い過ぎちゃいましたね」

「じゃあ2，2で分かれて入れ替えしようか！」
「なら僕はサンラクと。で、ペンシルゴンは茜ちゃんとあっちね」
「ちょっとちょっと?!勝手に決めないでよ！」
「俺もそれでいいぞ。れ……レイ氏とモルドとトレードで」
「はっ、ひゃいっ！」

――

「どう思う？僕はビリ」
「えっと……？」
「俺は３位。賭けてもいい」
「フルーツオレ１本」
「二人とも何の話を……？」
　玲さんやモルドには分からん話だよ。
「取り敢えず半荘でいいか。ルールは分かったかモルド？」
「大丈夫です」

◆◆◆

「ルストちゃんホント赤好きだよね～」
「……」
「ルストちゃん？」
「……ロン」

――――

「茜ちゃんは今回は鳴かないのかな？」
「はい！すごく今いい感じなので！」

「そ、そう……」
「あっ、これ自摸だと思います！」
――
「京極ちゃん？大役狙うのは良いけど和了らなきゃ意味ないよ？」
「今回は和了るんだよ！」
「あ、それポンね」

◇◇◇

「喰らえっ！小三元！」
「大三元じゃない?!」
「お前が序盤発捨(ハッ)てなきゃいけてたわ！」
――
「つ、ツモです」
「断么九か、堅実にいくねレイ氏」
「……まってサンラク、これ、ドラ3だよ」
――
「またピンフか？プロゲーマー」

「和了ったもん勝ちだよ」
「すみません、ロンです……えっと、対々和？」
「いやそれ「三暗刻」ですね」

◇◇◇

「くそ、なんで買ったのに奢らなきゃいけないんだ」
「さんきゅー。そら賭けの内容は「ペンシルゴンが何位になるか」だからな」
「あれそういうことだったんだ」
流石にロマンを求めすぎたな。まさかドベになるとは……やっぱり乱数はクソだな。
「確率のせいにするから勝てないんだよサンラク」
「しれっと心を読むな。配牌は結局のところ運だろ」
「で、なんで3位って分かったのさ」
「そらあれだよ」
「……カッツォさんもビリ予想でしたけど、さっきの卓では2位じゃありませんでした？」
玲さんとモルドは不思議そうだな。
「さっきの卓はね、ペンシルゴンが会話で捨て牌をコントロールしてたんだよ」

カッツォの言うとおり、だと俺たちは考えている。
「途中から煽り始めたと思ったら調子が上がったからなアイツ。まず間違いないだろ。」
「だから茜さんとペアだったんですね」
「なになに～？　謀（はかりごと）？」
「お前の話だよペンシルゴン」
「ははは。茜ちゃんは誘導してもツモ和了りするし、ルストちゃんは頑なでねぇ、全然だったよ」
1位秋津茜、2位ルスト、3位がこいつで、ドベ引いたのは京極だ。上位2人に通用しない分、京極で遊んだなコイツ。負けたのにイキイキしてやがる。
「もう一度シャッフルするのも悪くないんだけどねぇ。メインは明日だし今日は早めに寝よっか。ね、みんな？」

◇◇◇

……喉が乾いた。
携帯端末を見れば時刻は0時。確か麻雀卓の前に自販機あったな。
「あれ、玲さん」

「りゃっ、らくろ……うくん、どうしたんれすか？」
「なんか目が醒めちゃって、飲み物をね……」
「そうでひたか」
　こうして自販機の前で会ったってことは玲さんも同じだろう。
「まあ折角だしあっちで飲みながら少し話す？」
「お、お願いします！」
「ココアで良かった？」
「ひゃい！」

　談話室に座り、温泉浴衣姿の玲さんに1本を渡す。
「そういえば」
「……？」
「ああいや、一緒にリニアに乗るのこれで3回目なんだなぁと思ってさ」
「……私としては今後とも……」
　よく聞こえなかったが、ここで「ん？今何か言った？」と訊くとタイミング次第でピザルート確定なんだよな。
「何か言った？」

「いっ、いえ！そ、そういえばびっくりしましたよね！降りるとき！」
「あー。あれはびっくりしたな」
まさかリニアの改札前でばったり秋津茜と会うとは思わなかった。
あっちは全く気付いてなかったが、アバターと同じ――いや、素顔とほとんど同じアバター、と言うべきか――なのですぐに分かってしまった。
「玲さんが機転利かせて声を掛けてくれてホント良かった。あのままだと迷子だったな」
「茜さん、だいぶキョロキョロしてましたから……」
「迷子と言えば、その後のルスモルも凄かったな」
ルストが先導する後ろでその二回りは大きいモルドが道を訂正してる様は中々だった。
「あのお二人は迷子にはならないかと……」
玲さんの言うとおり、どっちも立体把握能力はネフホロからしても明らかだし、迷子とは違うか。傍目からは迷ってるようにしか見えなかったが。
おそらく、ルストは感覚で道を選ぶ――そして８割方正解する――タイプで、モルドは地図を読むタイプ……いや、違うな。「ルストの道」が合っているか地図で裏取りしているんだろう。

「まあ2人1組ってだけでアドだしな」
「私たちも、その、ぺ……2人1組（ペア）、でしたしね」
「実際、玲さんがいて良かったよ」
「ひょえっ」
「1人遭難してただろうし」
「あ、あー……」
　いくら初めて来る場所だとしても、駅を出ていきなり左右を間違えるのはどうかと思うぞ京極。玲さんが電話番号を知らなかったら今頃どこにいたことやら。
「りゅ……京（きょう）ご……アルティメットさん、剣道は本当にお強いんですよ？」
「ペンシルゴンも言ってたけど全国常連なんだっけ？」
　リアルじゃ流石に勝てないだろうなぁ。
　そもそも幕末は天誅であって剣道でも剣術でもない。
「最近は特に……搦め手、といいますか、虚を突いた一撃にも強くなったそうで、関西の大会では孤高の域とか」
　天誅は剣道だったらしい。
「玲さんも柔道、やってるんだっけ？」

「いえ、私のは護身術で大会とかはあまり……」
「やっぱりリアルでやってる人は、フルダイブでも動きが違うんだよな。まあ、だからと言って強いとは限らないんだけど」
「……というと？」
「ほら、ゲームだと『現実離れした動き』もできるわけでさ、そういうのは」
「現実でスポーツをしてる人からすると死角になる、と」
「そ。逆にリアルの引っ張られて『ゲームらしい動き』ができないこともある」
「動きが読みやすくなるわけですね」
　ただまあ、正しい動きや運びを知っていることで有利になる場面も多いから、ここは一長一短だろうな。
「……あ、あのっ」
「少し肌寒いです……よね？」
「ん？、まあ言われて見れば……」
　軽く暖房が入っているとはいえ、夜間だしお互い浴衣だもんな。
　ココアももう無いし、ここらで御開きに……
「あ、あちらに、そのっ、あし、足湯があるので、どう……ですかっ?!」
「ほ、ほら、寝る前は少し体を。っ、暖めた方が！いいですし?!」

「まあ、玲さんがいいなら」
玲さんがバグるタイミングがよく分からないよ。

浴衣の裾を捲って足湯に浸かると、程よい温水が足を包み込む。
「あー……確かにこれは気持ちいい……」
というかこの旅館、足湯なんてあったんだな。さっき入ったときは全然気が付かなかった。
「玲さんも早く入りなよ」
「は、はい」
玲さんの浴衣の裾から白い生足が覗く。
程よい筋肉があり、それでいてすらっとした、運動のできる美脚という感じだ。
ゲームのパケ絵のヒロインなんかがよくこんな足をしてることがある――ゲーム内ではポリゴンが荒かったり、テクスチャがバグってたり、パケ絵詐欺系ゲームってのもよく聞く話だが。尤も、良作でもたまにパケ詐欺だけでクソゲースレに凸ってくるプレイヤーもいるから、パケ絵と違う＝クソゲーというのは流石に横暴か。
「流し目ゴリラ（ミナゴロシ大戦記）もグラがよければ……あれはダメか」
「……？」

「ああ、ごめん。なんでもないよ。脚綺麗だなっ……って……」
あ、
「え、と……そ、ありゃ、ありがとう……ござ。いまそゆ！」
「……こちらこそ……？」

玲さんがバグった。
今回ばかりは間違いなく俺が悪い。心当たりしかない。
セクハラ発言とか、鉛筆に知られたら間違いなく処刑よりも悲惨な末路になるやつだ。むしろバグ程度で済んだことに感謝するべきだ。
「ありがとう、玲さん」
「ぴぇあ?!」
「隣にいるのが玲さんで良かった」
「くひゅっ」
「わ、わ、わたっ、わしゃ(私)ひも、りゃくろう(楽郎)君と一緒で、うれひい(嬉しい)です！」

バグると滑舌が狂うの、流石に慣れてきたけどやっぱり面白(かわいい)いんだよな。……何て言ったのか分からないこともあるのは仕方ない。

……そういえば今深夜だったな。目が覚めたのが大体０時で、今は大体……

……

……

携帯見れば分かるじゃん。

「……？どうしたんれす？」

「いや、今何時かなって……あっ」

やべっ、携帯がっっっ

ビシャーン

と

「楽郎くん、大丈夫ですか?!」

「あー……うん。大丈夫……かな」

湯船に落ちそうになった携帯を救出するつもりが、自分が湯船に落ちてしまった。いや、携帯は辛うじて手の中だ。

「あー、玲さん、悪いんだけど携帯貰ってくれない？」

「あっ、はい！そのままだと起き上がれないですよね！」

湯船にうつ伏せのまま、玲さんに携帯を手渡し、ようやく姿勢を正す余裕ができる。
「ありがとう玲さん……だいぶ濡れたな」
「……」
あーあー。髪も浴衣もびしょ濡れだ。
「……」
というか浴衣に至っては透けてるな。
「玲さん、申し訳ないけど今日はもうお開きで」
「……」
「玲さん？」
「ひゃい！」
「着替えは部屋だし今日はもうお開きってことで」
「も、もちろん！風邪、引いちゃいますもんね！もう夜も遅いですし、ねまひょう！」
「うん。それじゃまた、明日」
「はい！おやすみなさい！お大事に！」

……

……

今日はもうだめだな。早く寝よう。

布団の中、明日の予定を確認しようとして……気付いた。

「……携帯端末玲さんに渡したままだ。」

「まあ明日貰えばいいか。」

旅狼のオフ会―遊びにきました！

旅狼のオフ会２日目

一晩経って２日目。

朝食は揃って会食室で、とペンシルゴンが予約していたらしく、部屋の前で鉢合わせた仲居さんに言われるまま、会食室へ向かう。

「遅かったねサンラク」

会食室に居たのは、オイカッツォ、京極、それと玲さん。

「昨日寝付けなくてな。首謀者は？」

「仲居さんによると、ガチメイク中。モルドは１回だけ顔出してルストを起こしに行ったよ」

「じゃあそこはモルドに任せればいいか。秋津茜は？」

「秋津茜ちゃんはみんなが集まるまで走ってきます、ってジョギング中」

「じゃあ俺はここで待つかな」

「あの……サンラクさん」

「玲氏、どうかした？」
おずおずと俺の携帯端末を差し出す玲さんを見て、昨日忘れていったことを思い出す。
「ああ、ありがとう」
「おやおやおやおや？」
「黙れカッツォ」
「まだ何も言ってませんが～？」
どうした京極、深刻そうな面持ちで。玲さんとないしょ話？なんだその顔は……
「皆さん、おはようございます!!」
ジョギングを終えたのか、ラフでスポーティーな格好の秋津茜が部屋に入ってくる。
「ジョギングは終了？」
「はいっ！軽く流すだけにしました！」
「急にどうしたよサンラク。立ち上がって」
「しばらく来ないなら、俺も少し走って来ようかと思ってな。カッツオも来るか？」
「僕は普段からジム通いなんでね。たまの休息くらい問題ないさ」
じゃあ1人で行くかな。
部屋を出ていこうと扉を開け

「うわっ?!」
　あ、モルドだ。
「いや改めてみるとデカいなモルド……」
「あ、サンラクか。突然すぎてびっくりした」
「ルスト起こしてきたのか?」
　その返答にはにかみながら向けられた指の先、視線を下にずらすと……いた。
「……ん」
　如何にも寝ぼけ眼のルストがモルドの服の裾を掴んで立っている。
「いや子供かよ……子供（中学生）だったわ」
「ほら、ルスト。席あそこだから座ろう?」
「……うん」
　モルドがルストを座らせたのを見て、その2つ隣に座る。
「サンラク、ジョギングは中止?」
「あと鉛筆だけなんだろ?なら待ってた方がいいだろ」
　……気付いたら玲さんが隣にいるんだけど、さっき座ってた席そこだったっけ?
　……
　……

……

「来ないな」

「来ないね」

ルストが眠気に耐えきれずモルドに膝枕されてるんだが、これ話題に触れていいやつ？

「メイクという話でしたが……大分気合い入れてますね……」

……

……

……

「みんなお待たせ～！」

「すごい待っ……た……よ」

「流石の重役出……き……ん」

「……遅い」

ルストはさっきまで寝てたから言うほど待ってないだろ。

いやそんなことはどうでもいい。

ペンシルゴンが来たのを見計らったように、次々と仲居さんが朝食を運んでくる。

いや、それはともかく、だ。

料理も運び終わり、仲居さんか礼をして部屋を出ていく。
「ペンシルゴンお前……その格好はどうしたんだ？」
「どう、って、これから1日出歩くんだよ？スーパートップモデルは変装もお手のもの、ってね」
「せめて食事のときは帽子は外すもんじゃない？」
「そういうカッツオくんは、変装の準備してるんだろうね？カッツオくんがいるせいで私までバレたら、どうなるか分かってるよね？」
「ナチュラルに脅してきたよこの魔王」
「そうだぞカッツオ、絶対に身バレはするなよ」
「えっ？そこで手のひら返されるの?!」
仕方ないだろ。天音永遠（ペンシルゴン）と一緒に出歩いてた、なんてバレたら、妹（狂信者）に殺されかねない。
「まあカッツオ君の変装は後でチェックするとして、皆さんお手を拝借」
「『手を合わせて』でいいだろ」
「「「いただきます」」」

◇◇◇

「はーい、みんな乗ってねー」

「このバスどうしたんだよ」
「旅館の送迎バスだよ。思い切って予約しちゃった」
「……昨日もこれで良かったんじゃ」
「過ぎたことは気にしない、気にしなーい」
まあ、駅から旅館まではほとんど距離無かったし別にいいけどな。
「どこにする向かうんですか？」
「んー、秘密、かな？」

釈然としないが、まあ乗らないことには始まらないな。
先にもう何人か乗ったけど、空いてるのは
・ペンシルゴンの隣――座ったが最後、弄られるな。無しだ。
・どちらも空いてる席――はルストとモルドが今座ったな。
・京極の隣――天誅されかねん。ゲームなら負ける気がしないが、大会優勝するレベルだっけ？というかバスの中で天誅するな。
……お、玲さんの隣の席が空いてるな。ここにするか。
「よろしく」
「は、はい。よろしく、お願いしますね」

　ということは秋津茜の隣にカッツオか。いやしかし……
「その変装はないだろ」
　ジャケットに野球帽とサングラス。なんともダサいというか不審者ルックというか。
「バレない、という点ではギリギリ、アリだけどねぇ」
　出発します、という運転手の声に少なからず姿勢を正す。

「あ、富士山ですよ」
　と、玲さんに言われて窓の外を見れば……うん。富士山だ。流石に間に県1つ以上挟んでるから小さいが、確かに見える。
「リニアからじゃ見れなかったから新鮮だな」
「ですね」
「小さいけど雑木林もあるな。母さんとか好きそうだ」
「自然がお好きなんですか？」
「自然というか、虫が大好きなんだ」
「お父様は確か釣り好きでしたっけ」
「そうそう。玲さん家のおじいさんと釣り仲間だとは思わなかったけど」

「以外なところに、縁ってあるものですね」
言われてみれば？
なんか母さんも海外に採集行くときは結構大所帯らしいし、案外名前出したら知り合い出てくるのかもな。
瑠美も読者モデル始めたから、それなりに顔が売れてそうだし……
「スモール・ワールドか」
「知人の知人のさらに知人を……と辿れば世界中の誰にでも行き着ける……でしたっけ」
「それそれ。家族の知人だけでも結構いそうだなって」
「そうですね」
「それ言ったら私たち全員ゲームで知り合った仲じゃない」
うお、鉛筆お前聞いてたのか。
「時代を彩るスーパーモデル天音永遠と知り合いなんて光栄だと思わない？」
リアルを知らなきゃそうかもしれないな。
「そういえばお前、瑠美には本性見せてんの？」
「妹さん……ですか？」
「そうそう。天音永遠のファンでさ。読モもやり始めたんだわ」

「現場で会うたびそれはもうすごいよ。それでもメイク落とさないよう、涙だけは堪えるのは流石サンラクの妹だね」
訂正。リアルを知ったとしてもわが妹は幻滅しない気がしてきた。
「……」
「ん？レイ氏どうかした？」
「いえ、妹さんにも会ってみたいな、と」
……いつでもどうぞ？

◇◇◇

「そろそろ着くから片付けてー」
鉛筆の号令に、いつの間にか始まっていた大富豪は終わりを告げる。
こういうゲームでの秋津茜は本当に強いな。外道が読み会いと煽り合いしてる横で、すんなりと大富豪を維持していた。
「……で、ここどこ？」
「由緒あるレジャーランド、わくわくめるらんど、だよ」
「なんて？」

「なんだその旧石器時代みたいな名前」
「これでも昔は有名なレジャーランドだったらしいんだけどねぇ。ほら、フルダイブＶＲとか、さ？」
　まあ俺たちはそもそもフルダイブＶＲで知り合ったゲーム仲間だ。知らないのが当然っちゃ当然なんだが。
「で、今はＡＲとＭＲメインでやってるってワケ。昔ながらの絶叫マシンもあるけど、まあフルダイブの方が安全にスリルが楽しめるから、物好きかアンチＶＲが多いみたいだね」

「……老舗って割には、人が少ない」
　言われてみれば、周りにいるのは俺達以外だと数人ポツポツというレベル。
「これなら変装要らなかったんじゃないのか？」
「空いてるであろう日を狙って予定組んだからね。あとカッツオくんはともかく、私が身バレしたらファンでここが埋めつくされるのが視えてるのでダメで～す」
　お前の信者（ファン）は蝗（イナゴ）かなにかなのか？

「ソレはともかく、行きたい場所ある人は挙手！」

「何があるかも分からないんだが？」
「いるよねー。こういう人」
「んっんー？もしかしてキミタチ、私の後ろのランドマップが見えてないのかな？」
「冗談だよ、そうだな……」
色々あるな。というか広い。有名だったってのもあながち間違いではないのかもしれない。
「……ココ」
意外にも、最初に声を上げたのはルストだった。
まあ、ルストのことだしロボゲーでも見つけたんだろ……ＡＲのロホゲーってなに？
「ルストのやつ、一体どんなロボゲーを……あれ？」
「どうしたの？」
「これ、屑癌じゃん」
へー、こういうところに置いてあるのか。
「スクラップ・ガンマン、ね」
「ＪＧＥでデモしてたガンシューだっけ？」
「あ、あの、みなさん」
「ん？どうかした？モルド」

「もうルスト走ってっちゃいました。すみません」
　うわほんとだ居なくなってる。
「よーし、同士諸君！追いかけるよー！」
「同士呼びはやめない？」
「まあ、ゲーム前の肩慣らしにゃ丁度いいだろ」
　よーい、ドン！
　あっ、ペンシルゴンお前故意にフライングしただろ今！

◇◇◇

「いやー、なんていうか、アレだね」
「だな」
「同感」
「「秋津茜（ちゃん）速すぎ」」
　途中からルスト関係なくレースに発展し、若干グロッキー気味な俺達と対象的に、一位をかっさらった上でまだ元気全開の秋津茜を見ていると、もう少し運動した方がいいのかなという気がしてくる。
「まあ、何はともあれ、やろっか。スクラップ・ガンマン」

「あー、俺もう少し休憩したい」
「では私も……」
　玲氏はなんか余裕ありそうだけど休むの？まあいいけど。
「じゃあ、トップバッター、秋津茜ちゃんと京極ちゃん、いっといで」
「はいっ！頑張ってきます！」
「龍宮院流を舐めないでもらおう」
　因みにルストは全力疾走しすぎて今モルドに膝枕されている。ありゃ当分ダメだな。
「ペンシルゴンさん！プレイ中です！」
「あー。まあ空いてるとは言え、先客がいたかー。じゃあ、終わるまで待とうか」
「いえ！隣のルームは空いてるのでそっち行きます！」
「そう、頑張って～」
「はいっ！」

　ほー。なるほど。ガラス越しにＭＲが見えるのとは別に、プレイヤー目線のＡＲ映像も画面に出してくれるのか。
「これ、見ているだけでも楽しそうですね」
「ルスト、始まったけど見る？」

「……もう少し……休む」

ガチャリ

お。終わったらしいな。

俺もそろそろ回復できたし、玲氏とリベンジと洒落込もうじゃないか。

「あれ？サンラク？」

ん？

「こんなとこにどうしたのさ」

「……失礼ですが、どちら様で？」

出てきたのはスーツ姿――流石に上着とネクタイは外している――の男性……いやまて？今スコア見えたけどランクＳＳ？こいつなにもんだよ。

「なに？サンラクくんの知り合い？」

「その声は……変装でよく分からないけど、もしかしてジャイアントキリング？」

こいつ、ペンシルゴンとも知り合いか。声で分かるってことは……声？

「いや、どっかで聞いたことある気が……」

「ああ、リアルだと会うの初めてだったっけ？僕だよ。ヤシロバード」

ストン、と全てが腑に落ちる音がした。

「……社長が自社製品でランキング独占すんのはどうかと思うぞ」
「ああ、これは新モジュールのテストだからオンラインには載らないから安心してよ」
つまりプライベートでやってる時のは載ってる、と。
変態銃マニアがよ。
「ん？もしかして隣にいるの、あの時の彼女さん？」
「かっ、かのっ、のっ……のっ……」
あ、バグった。
「えーと？なんかやっちゃった」
「今日は旅狼（ヴォルフガング）のオフ会でーす」
「そういえば身内ギルドだったね君たち」
そう言って津羽目風矢（ヤシロバード）は一同を見渡し
「君たちがルストとモルドかな？機舎（リヴァイアサン）ではお世話に……なんで膝枕？」
「ちょっと疲れてまして……」
「後は多分シャンフロでもあったことな……いや、京極はあるな。彼女は？」
「隣でプレイ中だよ。秋津茜も一緒」
「ああ！竜の子ね！ってことは……」
「こちらサイガ―０氏」

「黒狼（サイガ－１００）のお姉さんには世話になってるよ。よろしく言っておいてもらえると嬉しいな」
「あ、はい」
挨拶も終わったし、という雰囲気で去ろうとしているが、ヤシロバード、１人忘れてるぞ。
「僕そこまで影薄い？」
「まあユニーク自発してないからねぇ……」
「あぁ、ごめんよ。こちらは……？」
ちょっと待って、と頭をひねっている。
「あ、分かった！君がオイカッツオだね？ウェザエモンの時にアナウンスのあった！」
「どうぞお見知りおきを」
お、カッツオの声、あれちょっと機嫌悪いな。
「ん？待って？その声……」
どうしたヤシロバード。カッツオの顔なんか、見つ……め……あ、
「……魚臣慧選手？爆薬分隊の？」
バレた。